

「幸いの教え」

(マタイ 5:1～12)

挽地 茂男

2020.2.2 日本基督教団千歳丘教会礼拝

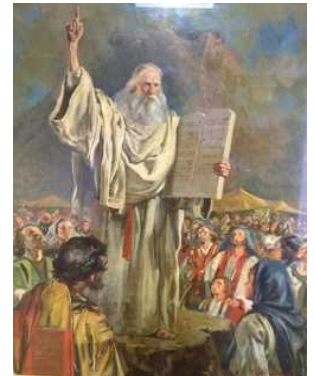
今日から「山上の説教」を読んでもまいります。ご存じのように「山上の説教」はイエス・キリストの説教(教え)の中で最も有名な説教(教え)であります。まず5章1～2節。

「5:1 イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。5:2 そこで、イエスは口を開き、教えられた。」主イエスはご自分の許にやって来る大勢の群衆を見て、山に登ります。そして、近くに寄ってきた弟子たちを前にして教えを語ります。群衆も一緒にこの教えを聞いていたことは、「山上の説教」の「結び」の7章28～29節を見るとわかります。「7:28 イエスがこれらの言葉を語り終えら



れると、群衆はその教えに非常に驚いた。7:29 彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。」

マタイによる福音書を見てまいりますと、山が大切な場所であることが分かります。山は「祈りの場」(14:23)であり、また「癒しの場」(15:29)であり、「教えの場」(24:3)であり、「啓示の場」(17:1, 28:6)です。か



つてモーセは、主の掟(十戒)を授かるために〔シナイ〕山に登りました。5章17

節を見ますと、主イエスは「律法を完成する者」(5:17)として山に登ります。主イエスの権威は、モーセの権威と二重写し(ダブル・イメージ)で描かれています。そして主イエスが口を開きます。いにしへの十戒が語られたときのように、厳かに教えが山に響きます。3節。「5:3 「心の貧しい人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである。」

「幸いなる者」についての宣言(5:3-12)です。12節まで9種類の「幸いな人々」についての宣

言が続きます。9つの宣言の文頭には、それぞれに「幸いな者」「幸いな」という言葉が置かれ、それに続いて、その「幸いな者」とはどのような者であるかが語られます。マタイの文章を言葉の順序のままに訳してみますと、「幸いな者、それは心の貧しい者である。なぜなら天の国はその人の者だからである」となります。文語調では「幸いなるかな、心貧しき者。そは天の国がその者のものなればなり…」となるでしょう。

この「幸いな者」「幸いな」というギリシア語が〈マカリオイ〉という言葉で、このような「幸いな者」に関する特徴的な表現形式を〈マカリズム〉と呼びます。この〈マカリズム〉は、旧約聖書にも、ユダヤ教文学にも、異教文学にも現れます。皆さんのよくご存じの所では、詩編の第1編が典型的な〈マカリズム〉です。

1:1 幸いなるかな〔新共同訳「いかに幸いなことか」〕／神に逆らう者の計らいに従って歩まず／罪ある者の道にとどまらず／傲慢な者と共に座らず 1:2 主の教えを愛し／その教えを昼も夜も口ずさむ人は。

旧約聖書では〈マカリズム〉の多くが知恵文学〔箴言がその代表〕と預言者(の書物)に見られます。箴言に代表されるような(1)知恵文学の〈マカリズム〉の特徴は、具体的な生活



における幸いを語ります。知恵文学は幸福な状態にいる人々の幸いを、観察と経験に基づいて「……こういう人は幸いだ」と宣言し、そして、彼らの現在の報いと幸福を語ります。旧約続編に「シラ書〔ベン・シラの知恵〕」という書物があります。その25章7－12節を見てみましょう。「シラ25:7 私が幸運だと思う(エマカリサ「私が幸いだと思う」)九種類の人がいる。十番目の人がいないわけではないが。

①自分の子供が誇りに思える人。
②生き永らえて、敵の没落を見届けられる人。25:8 ③(幸いなるかな)思慮深い妻を持つ人。④口を滑らせて失敗することのない人、
⑤自分より劣る者に仕えなくてもよい人、こういう人々は幸いだ。25:9⑥(幸いなるかな)分別を身に

つけた人、⑦聴く耳を持つ者に語る
ことのできる人。こういう人々
は幸いだ。〔一息はいつてさらに
続きます。〕 25:10 更に偉大な
のは⑧知恵を身につけた人。だが、
⑨主を畏れる人はもっと偉大だ。
25:11 主を畏れることは全てに勝
る。主を畏れて生きる人に比べら
れる者はいない。25:12 主を畏れ
ることは主を愛することの始め、
信仰は、主により頼むことの初め
である。〕非常に具体的、現実的
です——特に前半はそうです。知
恵文学では神への畏れ(信仰)や知
恵が、具体的な現実の結果や成果
として表現されます。強調点は現
在にあります。

一方預言者の語る〈マカリズム〉
の特徴は、現在不幸な状況にいる
人々が、将来、主が来られる時あ
るいは終末の到来によって、幸福
が保証され、彼らの未来(ないし
現在)の幸いが宣言されます(イ
ザ30:18, 32:20, ダニ12:12) 例え



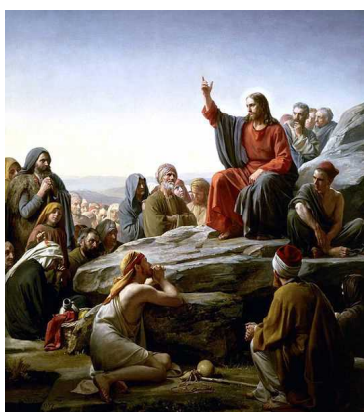
ば、イザヤ書30章18節。「30:
18 それゆえ、主は恵みを与えよ
うとして／あなたたちを待ち／そ
れゆえ、主は憐れみを与えようと
して／立ち上がられる。まことに、
主は正義の神。なんと幸いなこと
か、すべて主を待ち望む人は。〔幸
いなるかな、すべて主を待ち望む
人は。〕 預言者的〈マカリズム〉
の強調点は「主が立ち上がってく
ださる」未来にあります。

さてマタイの〈マカリズム〉は
知恵文学の〈マカリズム〉に分類
されるのでしょうか。それとも預
言者の〈マカリズム〉に分類され
るのでしょうか。実はマタイの〈マ
カリズム〉は、形式は知恵文学、
内容は預言者的なのです。時につ
いていえば、マタイの〈マカリス
ム〉は、知恵文学的な「今」と、
預言者的な終末論的「未来」が結
合されているのです。「すでに」
今体験されることと、「いまだ」
完成を未来の幸いに期待する待望
が同時に語られます。マタイの幸
いに関する9つの宣言〈マカリス
ム〉は、幸いな9種類の人々を列
挙します。この〈マカリズム〉は、
神の国〔天の国〕を期待しつつ
「今」を生きる、「世の終り」つ

まり未来の終末を意識の中にちゃんとすえて現在を生きる人々の幸いを宣言するのです。

そこで「幸いの教え」を読むに当たって、今申し上げたことを心にとどめておきたいと思います。つまり「すでに」と「いまだ」ということです。神の国は主イエスの来臨によって「すでに」教会において一部現実として経験されるようになっているものの、その完成は「いまだ」未来に待望されています。主イエスが語る「幸いの教え」にも「すでに」という面と「いまだ」という両面があるのです。未完成が完成へと向かうその途上に、わたしたちは生きているということです。

さて、第一の幸いな人々は、「心の貧しい人々」です。3節。「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」幸いを宣言されている人々は、逞しい自我と強い自尊心を主張する人々ではありません。すべてを神により頼む人々こそ幸い



だと語るのです。気仙語訳〔気仙沼地方の方言にギリシア語から翻訳された聖書〕では「頼りなく、望みなく、心細い人^{すあわ}ア幸せだ。神様の懐に抱^だがさんのアその人達だ」と訳していることは、すでにお知らせしました。天の国（神の国）は、心貧しく、神様に信頼を置くしか希望のない人々のものだと宣言するのです。この考え方は、人間の王国〔王権〕に関する考えを逆転しています。人間の王国は、逞しい自我と強い自尊心を主張する人々のものだからです。



では「心の貧しさ」とはいったい何でしょうか。すでにお話ししましたように、それは「あの人は心が貧しい」と人を評価する際の、心の豊かさや人格性を欠いているということではもちろんありません。精神的な渴望や謙虚さを含みますが、この表現はもっと深い次元をさしています。「心の」と訳されている言葉は、わたしたちがふつう考える「心」ではありません。それは「霊」（プネウマ）と

という言葉なのです。それは聖霊の「霊」であり、神が人に与えて人を生きる者としている「霊」なのです。それは人間存在の基盤（根底）、人間存在の全体をさしている言葉です。そして「貧しさ」の認識は、自分の内側を内向的に見つめることによって出てくるものではないのです。それは偉大な霊的存在、つまり神を知ること、仰ぎ見ることによってのみ与えられる認識なのです。世界を造り、わたしたちを造り、生かしておられる方を仰ぎ見るときに与えられる感情なのです。それは自分の至らなさを責める、自虐的な表現ではないのです。偉大なる存在の前に立ったときに人間の口から漏れる正直な言葉なのです。「わたしは貧しい。」しかしこの貧しさは、即、豊かさなのです。この貧しさは、即、幸いなのです。その貧しさは、さまざまなものを産み出す



貧しさなのです。能産的な貧しさなのです。そして、それが幸いであることを知り、それを幸いだとおっしゃる方は、わたしたちと共におられるのです。

第2の幸いな人々は、「悲しむ人々」です。4節。「悲しむ人々は、幸いである、／その人たちは慰められる。」ここでマタイのいう悲しみは、深い聖書的伝統に棹さおさしています。つまりその伝統のいう「悲しみ」とは、真の神の民がもつ特徴の一つとしての悲しみなのです。真の神の民は、神の民の現状を見てその現状が神の御心にそっていないのを知るとき、その現状を嘆き悲しむのです（哀歌、嘆きの詩編等参照）。この幸いの教えの基礎となっているイザヤ書61章1－11節では、イスラエルの民は聖なる都の荒廃を嘆き悲しんでいます。つまり神の民は、この世界の現状に甘んじて従うのではなく、神の国がまだ到来せず、現実の世界で神の意志がなされていないという事実³に悲しみを覚えるのです（マタイ6:10）。

「慰められる」という動詞は未来形の受動態（受身形）です。受動態は神の名前をはっきり言うのを

避けるために、ユダヤ人によって使用されることがよくあります（神的受動態と呼びます）。「慰めを与えてくださる神さま」はこの受動態に隠れています。つまりこの言葉は「悲しむ人々は幸いである。神ご自身が、悲しむ人々を慰めてくださるからだ」と告げるのです。

第3の幸いな人々は、「**柔和な人々**」です。5節。「**柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。**」この言葉は、詩編37編9節——の「悪事を謀る者は断たれ、主に望みをおく人は、地を継ぐ」という一節——を素材にして、一つの幸いの教えとして再構成した言葉です。「柔和な」という言葉（プラエイス）は、マタイ福音書に多用される特徴的な用語で（11:29, 12:18-21, 21:5）、地上の覇者（武力で地を受け継ぐ者）である王に関する思想を逆転します。「柔和な」という表現は、自分たちがこの世界において抑圧されていることを認識しつつ、この世の権力の暴力的な方法を放棄した人々の特徴を描きます。「地を受け継ぐ」は、元来イスラエルの民がカナン（パレスチナ）の約束の地を取得することを意味する表現ですが、ここでは新しい世界

に参与するという未来（終末論）的な^{メタファー}隠喩になっています（マタイ19:28）。ここには現世的な成功を勝ち取るための駆け引きや戦略は一切ありません。神が与えてくださるからです。神には、人間の駆け引きも戦略も通用しないのです。

第4の幸いな人たちは、「**義に飢え渴く人々**」です。6節。「**義に飢え渴く人々は、幸いである、／その人たちは満たされる。**」〈義〉（ディカイオシュネー）はマタイ福音書の鍵となる概念です。義に飢え渴くという表現の第一の意味は、神の意志を積極的に行おうとすることです（マタイ6:1-18）。第二の意味は、神の正義（旧約聖書のツェダーカー）を確立しようと努力することです（6:33。イザ51:1, 5参照）。義に飢え渴く人々は、単に個人的に敬虔であったり、理想主義的な夢想家や社会改良家であることを熱望する人たちではなく、5章4節の人々のように、彼らは神の国の到来と自分たちの正しさが立証されること——それは神の国の到来と共に



もたらされる——を切望し、この希望に基づいて能動的に神の意志を実行する人々なのです。この切なる求めは、空虚な希望ではなく、やがて「満たされる」と再度神の受動態で表現されます——すなわち神がそれを満たして下さるのです。

第5の幸いな人々は、「**憐れみ深い人々**」です。7節。「**憐れみ深い人々は、幸いである、／その人たちは憐れみを受ける。**」ここでマタイは、「憐れみ」を意味する言葉（エレエーモーン）を使っています。そしてこの言葉は、単に憐れみ深い性質や性格を指すよりも、むしろ憐れみに満ちた具体的な行為を指しています。すでにマタイ福音書の冒頭の場面でヨセフが身重になったマリアを、人々の侮蔑の目にさらすのを避けて密かに去らせようとした行動が例証しているように——マタイはこのヨセフを「正しい人」と呼びます



ゴッホ「善きサマリヤ人」

——マタイにおいては「正義」と「憐れみ」は別物ではないのです（1:19。また20:1-16、特に4節を参照）。「憐れみ」は人の苦しみや悲しみに共感する情緒だけではなく、正しい判断に基づいた、正しい行動の1つなのです。憐れみがマタイ福音書において重要な役割を持っていることは、9章13節と12章7節において二度、「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」というホセア書(6:6)の言葉が繰り返されていることによって確認できます（23:23の付加と、18:21-35の譬え、特に33節参照）。マタイの幸いの教えのいずれにも、この世界でうまくやって行く処世術ための助言は存在しません。憐れみは、本質的に報いを期待できるものではありません。弱い人たちに向けてなされる善なる行為だからです。しかし神はその憐れみに憐れみをもって返して下さるのです。ここでも未来（終末論）的な神の受動態（神の受動態）が、憐れみ深い人々に憐れみをお与えになる神さまの存在をさりげなく指し示しています。

第6の幸いな人々は、「**心の清**

い人々」です。8節。「心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。」このイエスの言葉は、詩編24編3－4節の言葉を、幸いの教えの形式に組み込んで表現し直しています（5:5参照）。詩編24編3－4節の言葉。詩24:3 どのような人が、主の山に上り／聖所に立つことができるのか。24:4 それは、潔白な手と清い心をもつ人。むなしいものに魂を奪われることなく／欺くものによって誓うことをしない人。

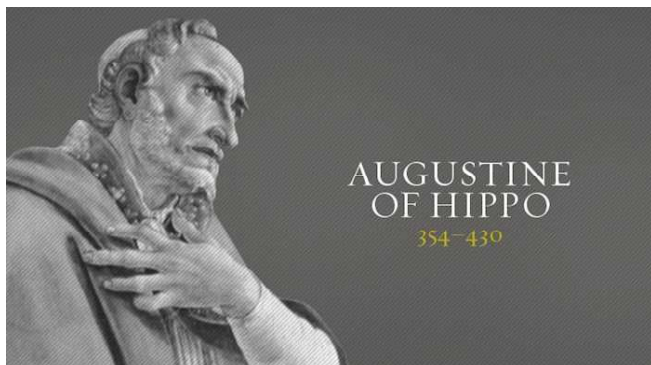
「心の清さ」は単に「不純な思い」（例えば、性的な空想）を避けるというようなことではなく、唯一の神を信じる信仰にふさわしい神へのひたむきな心のあり方や、献身を指しています。「一すじの心」とか「一つ心」「一心」という表現が当たっています〔英訳「分かれていない心」undivided heart（詩86:11）〕。「一心」であるということは、唯一神教の必然的な結果であって、数多くの宗教的忠誠に自分自身を分割（配属）する機能的な多神教とは違い、自分のすべてを献げるに値する、十分に大きい、そして十分に優れた存在者（＝神）を前提としているので

す。唯一の神に対する信仰は、人が心を尽くして、全身全霊を献げることを要求するのです。「心を



尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」（申6:4-5。マタ22:37参照）と神は言われるのです。パウロは「兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません」と告白し、「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ」（フィリ3:13）神を求めることだと語りました。またルカ福音書の主イエスは、主イエスを客として迎えて忙しく立ち働くマルタが、主イエスの言葉に聞き入っていて何もしないでいる妹のマリアをたしなめるように求めたとき、「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」（ルカ10:41-42）と答えられたのでした——一つのものに向けられた心

を主イエスは大切にすることです。ですから、心の清さの反対は、「二心」ということになるのです。ヤコブ書4章8節。「4:8 神に近づきなさい。そうすれば、神は近づいてくださいます。罪人たち、手を清めなさい。二心の(心の定まらない)者たち、心を清めなさい」〔口語訳、新改訳「二心」、新共同訳「心の定まらない」〕。「二心」それは二人の主人に仕えようとすることであり(マタ6:24)、信ずべき方を何かと天秤に掛けて「疑う」(マタ14:31, 28:17)ことなのです。この「疑う」という言葉(ディスタゾー)は、文字通りは「二つの心を持つ」という意味の言葉です。そして「二心」「二つの顔」はファリサイ派の人々の特徴でもあるのです(23:25)。アウグスティヌスは自分の人生の混乱を告白して「唯一の神であるあなたに背を向けている間、わたしは多くの事どもの間で自分自身を失いました」



(Augustine Confessions 2.1) と語り、キルケゴールは「心の純粹は一つのことを望むことである」(Kierkegaard, Purity of Heart Is to Will One Thing (New York: Harper and Bros., 1948))と宣言したのです。「一つ心」に「神が見えて」くるのです。「すでに」この世においても、「やがて」神の国が成就するときにも(Ⅰコリ13:12、黙22:4)。

第7の幸いな人々は、「平和を実現する人々」です。9節。「平和を実現する人々は、幸いである、／その人たちは神の子と呼ばれる。」パレスチナのユダヤ人キリスト教徒が、主イエスの平和思想(反戦思想)を受け継ぐ弟子として、西暦66-70年のローマとの戦争(ユダヤ戦争)を戦うことを拒否したという伝承があります。

「平和を実現する人々は、幸いである、／その人たちは神の子と呼ばれる」という言葉には、主イエスの思いとともに初期のキリスト教徒の思いが反映しています。歴代のローマ皇帝は、自分たちを「平和をつくる者」、また「神の子」と呼びました。しかし主イエスが語る「平和を実現する人々」は武

力によって平和を実現する人々ではありません。その平和を実現するための努力は、武力によらない和解のための能動的で積極的な行動を意味しています。おそらくマタイは戦争を直接経験していないと考えられますので、その場合、彼は平和をつくるということを、対立する宗教的、文化的グループの和解ということに向けている可能性があります。再び終末論的な神的受動態が、神が最後の審判において平和をつくる者たちを、神が「神の子」と呼ぶと語ります。しかし「神の子」は、呼び名の問題ではなく、彼らが、真の神の民に属する者とされ、神の民のために約束された相続に与る者となるということの意味しているのです（ホセア1:10）。

第8の幸いな人々は、「義のために迫害される人々」です。10節。「義のために迫害される人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである。」幸いを宣言されている人々は、虐げられている人々一般を指しているのではありません。正義のために不当な迫害を受けた人々をさしています。「義のために」（10節）と「わ

たしのために」（11節）の間の並行関係は、義がマタイにとってキリストと関係していることを示しています。10節は、ここまでの一連の幸いの教えを「義」に言及することによって、第9の迫害を受ける人々の幸いへと橋渡しをしています。

第9の幸いな人々は、「キリストのために迫害される人々」です。11－12節。「わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」弟子たちが求められているのは、迫害にもかかわらず「喜ぶ」ということではなく、迫害を受けていること自体を「喜ぶ」ということ

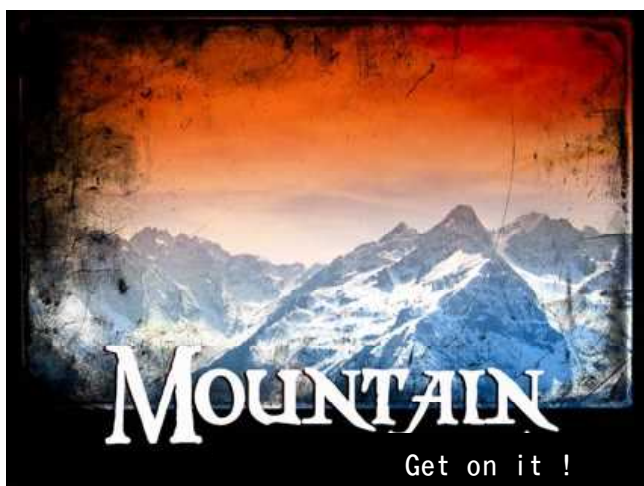


山上の垂訓教会

です。迫害を喜ぶことは、殉教者の屈折したマゾヒスティックな心理を表現しているのではなく、信仰の共同体がこの世の価値体系の外に存在することを確認することであり、自分たちが神の民に属していることを示すしるし(バッジ)を得たことを喜ぶことなのです。つまり、かつて迫害を受けたイスラエルの預言者と同じなのです。ここで預言者のイメージを導入することによって、次の「地の塩」(5:13)と「世の光」(5:14-16)のメッセージへと移行が可能になります。つまり預言者は、自分自身のために存在するのではなく、この世界への使命を託されているからです。「地の塩」は地のために、「世の光」は世のために存在するものだからです。つまり3-12節の弟子たちに対する幸いの宣言は、彼らが他者への幸いの仲介者

となることをも目的としているのです。

幸いの教えは「…である(are)」と「…するであろう(will)」が特徴です。幸いの教えはそれぞれ現在時制で「…は幸せである(blessed are …)」と始まり、未来時制に移動して、「なぜなら彼らは…するからである(for they will …)」となります〔邦訳では理由句と未来形が不明瞭〕。現在時制は、幸いの教えがキリスト教共同体にとって「すでに」今現在、真理となっていることを表現します。もちろん、すべての教会のすべてのメンバーが柔和で、憐れみ深く、心が清いと主張でき訳ではありません。それゆえ幸いの教えは未来形によって「いまだ」未完成な部分を確認し、未来における完成を待ち望むのです。すべての真のキリスト教会には、柔和な人々や、憐れみに富んだ教職者や、平和のために働く人々を見出すことができます。わたしたちの間に彼らが存在し活動しているということは、神の祝福のしるしであり、わたしたちの日常生活をますます神の国の価値に相応しいものにするようにという、わたしたちへの



呼びかけでもあるのです。

幸いの教えの未来時制は、神の民が信じる神に相応しい生活を求めつつ、神が新しい創造を終える終末まで、究極的な神の保証を待望しにつける存在であることを意味します。幸いの教えの未来時制は、キリスト教が今日、現在の瞬間に人々を成功に導き、平穏な生活を与えるために考案された「生活の哲学」ではありません。キリスト教は、ストレスを減らし、体重を減らし、仕事上の昇進を獲得し、病気から人を守ってくれる、ありがたい教えではないのです。そうではなくて、キリスト教信仰とは、柔和さが神のあり方であり、正義と平和が最終的に勝利し、神の未来は残酷な行為がなされる時ではなくて憐れみの時である、という堅固で確実な希望をもち、その希望に基づいて、そのように生きようとする一つの生き方なのです。だから、今そのような生活を送る人たちは幸いなのです。それはたとえこのような生活が愚かに見える時でさえそうなのです。なぜなら彼らは、結局、神によってその行為の正しさ(正当性)を保証されるからです。

新しい1週間も未来をしっかりと見つめつつ、今現在を大切に精一杯過ごしてまいりましょう。祈ります。

2020.2.2 日本基督教団千歳丘教会礼拝

